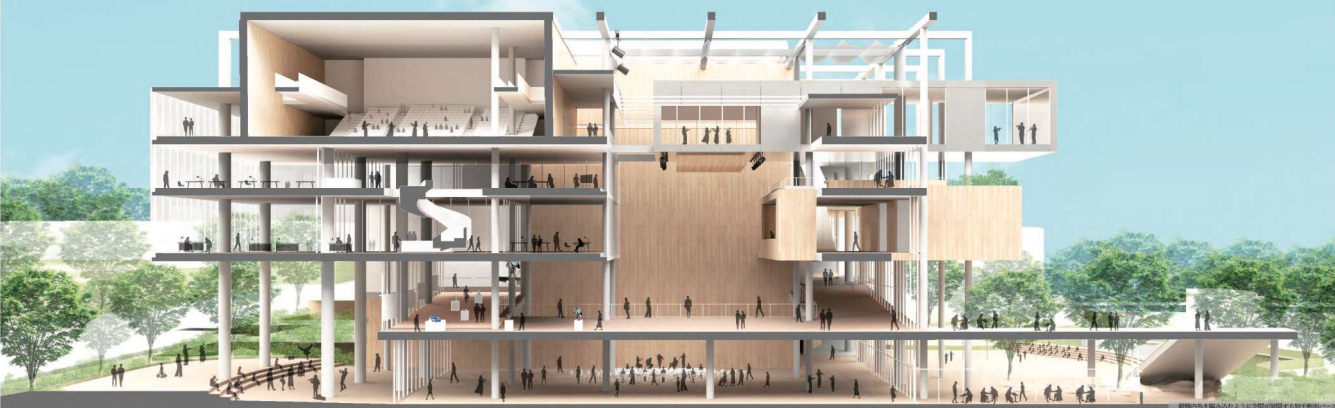


あえて高く引き上げられた大きな気積が、豊かな音環境と多様な半屋外空間をつくり出す



① 青葉山エリアの中で景観的位置づけ・周辺との調和

あえて建物を高く引き上げることで大きな気積の中に、テラスや外の吹き抜けなど多様な半屋外空間が同時に立ち上がっています。それによって内外の境界が解かれ、施設然として閉じられるホールが広場のように開かれています。透けた建物の先に山の緑や空が見え、それを風が抜けていくことで、自然と調和した、気軽に訪れやすい建物が生まれます。

建物内外の7つの広場と散歩道が河川敷まで繋がる

山から河川敷まで繋がる地形と散歩道を活かしてランドスケープを形成し、その有機的なネットワークの中に7つの広場を編み込みます。場所の特性を活かした各々の広場は内外も繋ぎつつ、エリア全体を音と人が集まる場へと変えていきます。



大きく堂々とした建ち姿が人々の心の拠り所となる

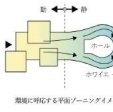
木の上に姿を響かせるかつての青葉城のように、建物が大きく堂々と建つことで、それが人々の心の拠り所となります。大きいということが、震災を思い出し不安になる心を穏やかなものへと変えていきます。



② 立ち寄りやすく多様な時間を通すご人々が共存する空間づくり

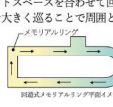
ホールを反転し、奥行のある敷地を長く使うことで自然と動の棲み分けが生まれる

大ホールのホワイエ位置を反転し、敷地の奥に計画することで、賑わいから距離を取りつつ囲まれた落ち着いた非日常の場が生まれます。奥行のある敷地全体を長く使うことによって自然と動と静の棲み分けが起こり、多様な時間を通すご人々が共存する空間をめざします。



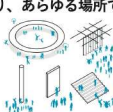
2階全体を回遊する震災メモリアルリングが建物の表裏をなくし、機能を溶かして進む

中心部震災メモリアル拠点機能とクワイエットスペースを合わせて回遊式の空間とし、2階に回します。建物全体を大きく巡ることで開閉との繋がりをもちつつ、表裏の無い構成を持っています。また動と静の間を行き来する多様な場の中に他機能との繋がりが生まれます。建物全体で緩やかな共存が図られています。



千鳥状に並ぶ太さの異なる柱が散策を促し、出会いと発見と交流のきっかけとなる

長さや負担荷重に応じて径の異なる柱が千鳥状に並ぶことで、林のようなムラのある場が生まれ、訪れた人の散策意欲を促していきます。こうして様々な機能や人々が同居する建物の中に音楽を中心とした出会いと発見と交流が生まれ、実質に強い人と人の繋がりが育まれています。



③ 建築空間の魅力とゾーニング及び動線計画

様々な音や気配が光や風と共に空間に編み込まれる

大きな気積と空間の奥行の中で音や気配がやわらかく感じられ、それが陽の光や風と共に編み込まれることによって各々に心地よい居場所が見つかります。

すべての機能が交流広場を囲むように浮かぶ明解な構成が、多様な繋がりを生み出す

すべての機能が中央の交流広場を囲み浮かぶ、明解な構成となっています。訪れた人が分かりやすいだけでなく、機能間に余白がたっぷり取ることによって、多様な繋がりが生まれていきます。

様々な距離を網み込む

建物内部だけでなく、周囲の広場や広瀬川、仙台市内、そして上層階へ行くも視野が遠くの海岸へつながります。こうして建築を通して様々な距離が編み込まれることによって空間と居場所に奥行きが生まれていきます。

自分の距離感で過ごすクワイエットスペース

クワイエットスペースは敷地奥の緑に囲まれた最も静かなエリアに設けます。凸型に湾曲した空間に沿って長いベンチが回ることで、向かう方向や隣の人の距離感を自分で決めて過ごし、昂った感情を落ち着かせ心の平穏を取り戻します。

